

最終講義にかえて

『資本論』のドイツ語

— 語学的注解 —

有 田 潤

解 説

筆者は1991年12月17日、早大独文学会主宰の研究発表会で「話法の諸形態」と題する院生諸氏のための授業を行ない、慣例のいわゆる「最終講義」は辞退した。そういう事情のもとで、本誌編集部のご好意により、最終講義の要旨を掲載する代わりに研究論文の寄稿が許されることになった。そこで、種々考慮の末、前々から試みようとして果たさなかった『資本論』、というより経済学者・思想家K. マルクスのドイツ語の語学的考察を試みることにした。分量がまことに僅かで、研究というにはほど遠いし、専門外の仕事であるから、おもわぬ誤りをおかしているかもしれない。この方面に関心のある諸氏のご批評がえられれば幸いである。

筆者としてはこれが本誌への最後の寄稿となる。多年にわたり拙稿の掲載でご面倒をかけた編集関係の諸賢に厚く謝意を表するとともに、本誌のいっそうの発展を祈ってやまない。

『資本論』には数種の邦訳があり、研究論文にいたっては目録だけでも膨大なものになろう。したがって、筆者のごとき経済学の門外漢がつけ加えるべきなものもないのだけれども、純粹に語学的な扱いは意外に少ないとのことであるから、あるいは多少の意味があるかもしれないと考え、本稿を執筆することにした。テキストはすべて、

エレメンタルフォルムの会編

「学習資料 5カ国語資本論」第1部 第1分冊

による。同書中の訳文を次のように略称する。

E = 英語版 F = 仏語版 J = 青木版・大月版邦訳

また

D = 『資本論辞典』1961, 青木書店

を参照する。(1)(2)……は筆者が便宜上つけた番号である。

(1)

KARL MARX

Das Kapital

Kritik der politischen Ökonomie

Kritik der politischen Ökonomie: Ökonomie はギリシャ語のオイコノミア *oikonomia* で、本来「家(オイコス, *oikos*) 政」である。そこで、対象範囲が国家・国民であることを明示すべく「ポリス(いわゆる都市国家)にかかわる、市民の」を意味する *politisch*, 英: *political*, 仏: *politique* < ギ: *πολιτικός* の語を被せたのがこの語法の由来である。英: *political economy*, 仏: *économie politique*。したがってこれらを経済“学”の意味で用いるのは本当はズレているが、慣用になったといってよい。また *Kritik* はギリシャ語の原義である「分離・分解」の意を活かしているようであるから、*Kritik der politischen Ökonomie* は本来は「経済的分析」と解するのが最も真義に近いであろう。「経済学批判」と訳されているが、『資本論』は学問の批判が目標ではあるまい。Eがこれを

A CRITICAL ANALYSIS OF CAPITALIST PRODUCTION

資本主義的生産の批判的分析

としているのは適切な意識におもえる。むろん本書が間接的に在来の学説の「批判」になっていることはいうまでもなからうが、目的はやはり資本主義

的経済システムそのものの分析であるに違いない。ただしDの「各国語版解題」によると、A Critique of Political Economy とする英語版もいくつもあるし、また仏語版も副題をつける場合は Critique de l'économie politique (たとえばジヤール版) がふつうであつたらしい。残念ながらDはこの問題について十分な記述をしていない。

Kritik が無冠詞形なのは表題だからである。

(2) Erstes Buch

Der Produktionsprozeß des Kapitals

Erster Abschnitt

Ware und Geld

ERSTES KAPITEL

Die Ware

Ware und Geld: 第1章の表題が Die Ware であるのに対して、これが無冠詞形なのは2語を対立させたためである。

(3) 1. Die zwei Faktoren der Ware: Gebrauchswert
und Wert (Werts substanz, Wertgröße)

Gebrauchswert und Wert: この無冠詞形も Ware und Geld の場合と同様の理由による。「使用価値」のほうにわざわざ Gebrauchs- をつけ、「交換価値」を単に Wert としているが、Fは、前者 valeur d'usage 「使用の価値」に対して、後者を valeur d'échange ou valeur proprement dite 「交換の価値すなわち本来の価値」としているのは明快な説明訳である。なお先へゆくと「交換価値」を文字どおり Tauschwert と書いている個所がある。しかし断りなしに単に「価値」といえば「交換価値」を指す、というのが原著者の意向であつたろう。「価値」はどんな場合でも本質的に相対的概念であるから、そうあるのが自然である。

(4) Der Reichtum der Gesellschaften, in welchen kapitalistische Produktionsweise herrscht, erscheint als eine „ungeheure Warensammlung“¹, die einzelne Ware als seine Elementarform. Unsere Untersuchung beginnt daher mit der Analyse der Ware.

¹Karl Marx, „Zur Kritik der Politischen Oekonomie“, Berlin 1859, pag. 3.^{1*}

^{1*}Siehe Band 13 unserer Ausgabe, S. 15

Das Reichtum der Gesellschaften : Gesellschaften と複数になっているから、ここは「諸社会」がよい。単に「社会」とすると、

単数形 eine Gesellschaft 1つの社会, 或る社会

単数形 die Gesellschaft [その] 特定の社会, 社会そのもの

のどちらかに受けとられるおそれがある。日本語には文法的範疇としての数がないから、必ずしもドイツ語のとおりにならないし、いつも直訳がいいというのでもないが、この場合などは原文どおり複数形で訳すのがいいであろう。その他の語も複数形を「諸～」と表わさなければならないことがある。

kapitalistische Produktionsweise : 「資本主義的生産様式」 die をつけることもできるが、名詞を語として、表現として際立たせたいときには、このように無冠詞形にすることが多い。

erscheint als ... : 「AはBとして現われる」でもよさそうに見えるが、A erscheint als B というのは「AはBである」という文意の単なる修辭的表現にすぎない場合が多いことに注意すべきである。したがって「AはBとして現象する」と訳すのは当たらない。現象という語を用いると、ただちに現象と本質という関連が連想されるが、「諸社会の富」が本質で、「膨大な商品の集積」がその現象である、といった関連があるならばともかく、そうでないかぎり、ここで「現象する」という動詞を用いるのは適訳とはいえない。この文型は

(1) Der Reichtum erscheint als eine ...

(2) die ... Ware [erscheint] als seine Elementarform

であって、(1)の *erscheint als* を E は *presents itself as*, F は *s'annonce comme* として (どちらも「現われる」を意味する)、原文の調子を出しているが、(2)のほうになると、E は *its unit being a single commodity* 「その単位は個々の商品である」と訳し、また F は、

L'analyse de la marchandise, forme élémentaire de cette richesse

この富の基本的形態〔である〕商品の分析

のように「富の基本的形態」を「商品」の同格的説明語にしている。以上で、原文の動詞 *erscheinen* は必ずしも「現象する」とする必要のないことが明らかになったとおもう。

(5) Die Ware ist zunächst ein äußerer Gegenstand, ein Ding, das durch seine Eigenschaften menschliche Bedürfnisse irgendeiner Art befriedigt. Die Natur dieser Bedürfnisse, ob sie z. B. dem Magen oder der Phantasie entspringen, ändert nichts an der Sache.² Es handelt sich hier auch nicht darum, wie die Sache das menschliche Bedürfnis befriedigt, ob unmittelbar als Lebensmittel, d. h. als Gegenstand des Genusses, oder auf einem Umweg, als Produktionsmittel.

²„Verlangen schließt Bedürfnis ein; es ist der Appetit des Geistes, und so natürlich wie Hunger für den Körper ... die meisten (Dinge) haben ihren Wert daher, daß sie die Bedürfnisse des Geistes befriedigen.“ (*Nicholas Barbon*, „A Discourse on coining the new money lighter. In answer to Mr. *Locke's* Considerations etc.“, London 1696, p. 2, 3.)

zunächst: 「さしあたり」「まず第1に」とすると第2, 第3……という順序を強調しているように受けとられるおそれがある。著者はこれから困難な商品分析に取りくもうとしているのであり、いきなり本格的な論議にはいれないので、「さしあたり」こう考えておく、といったような意味で *zunächst* の

語を用いたものとおもわれる。

ein äußerer Gegenstand : 「外的対象」 ここで「外的」というのは「人間の外部にある」の意。Eの an object outside us という訳が明快である。

Fは un objet extérieur としているが、このように単に「外的」とすると対象物自体の「内部」に対する「外部」を指しているように取られるきらいがある。

ein Ding : ein äußerer Gegenstand に付置された語 (いわゆる同格名詞)。この Ding は物的対象を意味すると解される。(7)に出てくる Warenkörper 「商品体」、すなわち物体としての商品、という概念からしても、この Ding 「もの」は具体物を考えさせる。

ob... oder... : 「～であろうと～であろうと」「～であれ～であれ」 随意の認容の基本形式である。少し先に ob als Lebensmittel ... oder ... とあるのもそれで、これを「～であるか、それとも～であるか」と、疑問文のようにいいまわすのはいい訳文とはいえない。

ändert nichts an der Sache : 「～を変えない」を nichts an ~^D ändern ということが多い。

... darum, wie die Sache das menschliche Bedürfnis befriedigt : 「物が人間の欲望を満足させるその仕方」 darum の da は wie die ... befriedigt を受ける。欲望の性質がどうであろうと、事柄に変わりはない、といったのを受けて、「.....欲望を満足させる仕方は問題にならない」という趣旨である。

ob unmittelbar... oder auf einem Umweg... : auf einem Umweg 「迂回して」は mittelbar 「間接的に」ということであるから、ここは「直接的に生活手段すなわち享受の対象物としてであろうと、間接的に生産手段としてであろうと」の意。

Lebensmittel : ふつうは「食料品」を意味するが、ここでは Produktionsmittel 「生産手段」と対照され、「生活手段」という広い意味である。この語をこ

ういう意味に用いるのは特別のことなのかどうか、筆者にはわからない。Dにも説明はない。

Gegenstand des Genusses: 「享受の対象物」 Genuß は「受用」あるいは「享受」であって、ここでは「享楽」は当たらない。

(6) Jedes nützliche Ding, wie Eisen, Papier usw., ist unter doppeltem Gesichtspunkt zu betrachten, nach Qualität und Quantität. Jedes solches Ding ist ein Ganzes vieler Eigenschaften und kann daher nach verschiedenen Seiten nützlich sein. Diese verschiedenen Seiten und daher die mannigfachen Gebrauchsweisen der Dinge zu entdecken ist geschichtliche Tat.³ So die Findung gesellschaftlicher Maße für die Quantität der nützlichen Dinge. Die Verschiedenheit der Warenmaße entspringt teils aus der verschiedenen Natur der zu messenden Gegenstände, teils aus Konvention.

³„Dinge haben einen intrinsick vertue“ (dies bei Barbon die spezifische Bezeichnung für Gebrauchswert), „der überall gleich ist, so wie der des Magnets, Eisen anzuziehen“ (l. c. p. 6). Die Eigenschaft des Magnets, Eisen anzuziehn, wurde erst nützlich, sobald man vermittelst derselben die magnetische Polarität entdeckt hatte.

ist . . . zu betrachten: この文型は (1) 「～されうる」 (2) 「～さるべきである」の2義がある。双方とも可能な場合が多いが、ここでは (1) に取るほうが通りがいいであろう。

nach Qualität und Quantität: 語順については拙著『ドイツ語学講座』26 「ワケ外構造」参照。

nach verschiedenen Seiten: 「さまざまな方面にむかって」が原意。

ist geschichtliche Tat: 「歴史のなせる業」というのは、「人類史において、そのつど行なわれてきたことである」の意。geschichtliche Tat は述語の無冠詞形。

So die . . . : So ist die ... と補う。

Findung : = Ausfindigmachen 「発見, 到達」

Verschiedenheit : 「差異, 相違」 「差別」という訳は適当でない。

(7) Die Nützlichkeit eines Dings macht es zum Gebrauchswert.⁴ Aber diese Nützlichkeit schwebt nicht in der Luft. Durch die Eigenschaften des Warenkörpers bedingt, existiert sie nicht ohne denselben. Der Warenkörper selbst, wie Eisen, Weizen, Diamant usw., ist daher ein Gebrauchswert oder Gut. Dieser sein Charakter hängt nicht davon ab, ob die Aneignung seiner Gebrauchseigenschaften dem Menschen viel oder wenig Arbeit kostet. Bei Betrachtung der Gebrauchswerte wird stets ihre quantitative Bestimmtheit vorausgesetzt, wie Dutzend Uhren, Elle Leinwand, Tonne Eisen usw. Die Gebrauchswerte der Waren liefern das Material einer eignen Disziplin, der Warenkunde.⁵ Der Gebrauchswert verwirklicht sich nur im Gebrauch oder der Konsumtion. Gebrauchswerte bilden den stofflichen Inhalt des Reichtums, welches immer seine gesellschaftliche Form sei. In der von uns zu betrachtenden Gesellschaftsform bilden sie zugleich die stofflichen Träger des—Tauscherts.

⁴„Der natürliche worth jedes Dinges besteht in seiner Eignung, die notwendigen Bedürfnisse zu befriedigen oder den Annehmlichkeiten des menschlichen Lebens zu dienen.“ (*John Locke*, „Some considerations on the Consequences of the Lowering of Interest“, 1691, in „Works“, edit. Lond. 1777, v. II, p. 28.) Im 17. Jahrhundert finden wir noch häufig bei englischen Schriftstellern „Worth“ für Gebrauchswert und „Value“ für Tauschwert, ganz im Geist einer Sprache, die es liebt, die unmittelbare Sache germanisch und die reflektierte Sache romanisch auszudrücken.

⁵In der bürgerlichen Gesellschaft herrscht die *fictio juris*, daß jeder Mensch als Warenkäufer eine enzyklopädische Warenkenntnis besitzt.

macht es zum Gebrauchswert: machen を用いて「AをBにする」という場合、
Bが名詞なら、macht A zu B とする。

Durch die Eigenschaften des Warenkörpers bedingt:「商品体の諸性質に制約されているから」 基礎語 (bedingt) を後置した述語句で、ここでは因由を表わす。

Warenkörper:「商品体」と訳されているが、「物体としての商品」の意であろう。旧東独のクラッペンバッハを含めて大辞典にない語であり、当然Dに解説が期待されるが、見当たらない。Fはこの「商品体」を le corps de la marchandise 「商品の(物)体」、あるいは単に le corps 「(物)体」と訳している。Durch die Eigenschaften des Warenkörpers bedingt を E が Being limited by the physical properties of the commodity 「商品の物的(物理的)諸性質に制約されているから」と訳しているのも参考になる。この箇所はFでは Déterminée par les propriétés du corps de la marchandise.

... existiert sie nicht ohne denselben: 「商品の有用性は物体としての商品を離れては存在しない」

ein Gebrauchswert oder Gut: 「1つの使用価値すなわち財」 「1つの使用価値または財」ではあるまい。

Dieser sein Charakter: 「商品体のこの性格」 dieser と所有形容詞が同時に用いられることがある。

quantitative Bestimmtheit: 「量的にどれほど規定されているか、ということ」 Bestimmtheit は「規定性」と訳してもかまわないが、Bestimmung とは多少違って意味が受動的であるから、「規定されていること」の意である。

verwirklicht sich: 「自らを実現する」よりも「実現される」、あるいは「現実のものとなる」のほうが日本語として通るであろう。

den stofflichen Inhalt des Reichtums: 「素材からみた富の内容」 stofflich を「質料的」と解すると、アリストテレス以来の「質料」と「形相」を連想さ

せるが、ここではそうではあるまい。訳文に哲学用語を濫用するとズレることが多い。

welches immer seine gesellschaftliche Form sei: 「その社会的形態がどんなであろうと」 認容文の1つ。

die stofflichen Träger des — Tauscherts: 「交換価値の素材的な担い手」 ここで「交換価値」が単に Wert ではなく、文字どおり Tauschwert といわれている。

(8) Der Tauschwert erscheint zunächst als das quantitative Verhältnis, die Proportion, worin sich Gebrauchswerte einer Art gegen Gebrauchswerte anderer Art austauschen⁶, ein Verhältnis, das beständig mit Zeit und Ort wechselt. Der Tauschwert scheint daher etwas Zufälliges und rein Relatives, ein der Ware innerlicher, immanenter Tauschwert (valeur intrinsèque) also eine contradictio in adjecto.⁷ Betrachten wir die Sache näher.

⁶„Der Wert besteht in dem Tauschverhältnis, das zwischen einem Ding und einem anderen, zwischen der Menge eines Erzeugnisses und der eines anderen besteht.“ (Le Trosne, „De l'Intérêt Social“, [in] „Physiocrates“, éd. Daire, Paris 1846, p. 889.)

⁷„Nichts kann einen inneren Tauschwert haben“ (N. Barbon, l. c. p. 6), oder wie Butler sagt:

„Der Wert eines Dings
ist grade so viel, wie es einbringen wird.“^[19]

das quantitative Verhältnis: 「量的な割合／比率／比例」

ein Verhältnis, das . . . : das quantitative Verhältnis, die Proportion ... と定冠詞づきで文をつづけてきたのを受けて、同じ名詞をこのように不定冠詞づきで出したのは、Dies ist ein Verhältnis, das ... 「これは……これこれの比率である」と改めて説明する関係文を導入する機会が多いといえる。「これは時と

所で絶えず変化する比率なのである」

Der Tauschwert scheint: この *scheinen* は「～のようにみえるかもしれぬが、じつはそうではない」というときの *scheinen* である。

ein der Ware innerlicher, immanenter Tauschwert: 原文に挿入されたフランス語 (*valeur intrinsèque*) のあとに *scheint* を補う。交換価値が「なにか偶然なもの、純粹に相対的なもの」だとすれば、「商品の中にある、本来の交換価値などというものは形容矛盾にみえる」ということである。*innerlich* は純ドイツ語、*immanent* はラテン系で、意味にそう大きな差異はないけれども、*immanent* のほうは「本質的な、固有の、本来の」を表わし、これに対して *innerlich* は「商品に“内在する”」という点を指摘するために用いられた。*Tauschwert* についている不定冠詞は仮構的不定冠詞の典型で、なんらかの意味で否定されるために一時取りだされた概念に用いることが多い。

(9) Eine gewisse Ware, ein Quarter Weizen z. B. tauscht, sich mit x Stiefelwiche oder mit y Seide oder mit z Gold usw., kurz mit andern Waren in den verschiedensten Proportionen. Mannigfache Tauschwerte also hat der Weizen statt eines einzigen. Aber da x Stiefelwiche, ebenso y Seide, ebenso z Gold usw. der Tauschwert von einem Quarter Weizen ist, müssen x Stiefelwiche, y Seide, z Gold usw. durch einander ersetzbare oder einander gleich große Tauschwerte sein. Es folgt daher erstens: Die gültigen Tauschwerte derselben Ware drücken ein Gleiches aus. Zweitens aber: Der Tauschwert kann überhaupt nur die Ausdrucksweise, die „Erscheinungsform“ eines von ihm unterscheidbaren Gehalts sein.

tauscht, sich: このコンマ [,] は不要。独文の誤植である。

statt: 「～ではなくて」

Die gültigen Tauschwerte: 「妥当な諸交換価値」

Der Tauschwert kann überhaupt nur die Ausdrucksweise, die „Erscheinungsform“ eines von ihm unterscheidbaren Gehalts: ihm は Tauschwert を受ける。「交換価値は、それから区別できる或る内実の現われ方、すなわち“現象形態”である」はじめに述べた「現象する」と違って、ここでは「現象」の語が生きている。

(10) Nehmen wir ferner zwei Waren, z. B. Weizen und Eisen. Welches immer ihr Austauschverhältnis, es ist stets darstellbar in einer Gleichung, worin ein gegebenes Quantum Weizen irgendeinem Quantum Eisen gleichgesetzt wird, z. B. 1 Quarter Weizen = a Ztr. Eisen. Was besagt diese Gleichung? Daß ein Gemeinsames von derselben Größe in zwei verschiedenen Dingen existiert, in 1 Quarter Weizen und ebenfalls in a Ztr. Eisen. Beide sind also gleich einem Dritten, das an und für sich weder das eine noch das andere ist. Jedes der beiden, soweit es Tauschwert, muß also auf dies Dritte reduzierbar sein.

Welches immer ihr Austauschverhältnis: sein mag を補う。つづく es ist ... が倒置にならないのは、この認容文のためである。

Gleichung: 「等式」がよい。未知数がないのであるから「方程式」は不可。

Daß ein ...: Sie besagt, daß ... と補う。

existiert: 「存在する」 existieren を「実存する」と訳するのは特殊な哲学説の場合で、それ以外は適当でない。

an und für sich: 「そのものとしては、それ自体では」

soweit es Tauschwert: Tauschwert ist と補う。「それが交換価値であるかぎり」

(11) Ein einfaches geometrisches Beispiel veranschauliche dies. Um den Flächeninhalt aller gradlinigen Figuren zu bestimmen und zu vergleichen, löst man sie in Dreiecke auf. Das Dreieck selbst reduziert man auf einen von seiner sichtbaren Figur ganz verschiedenen Ausdruck — das halbe Produkt seiner Grundlinie mit

seiner Höhe. Ebenso sind die Tauschwerte der Waren zu reduzieren auf ein Gemeinsames, wovon sie ein Mehr oder Minder darstellen.

Ein ... veranschauliche dies : 「簡単な幾何学の例でこれを説明してみよう」

これは ... soll dies veranschaulichen といってもまったく同じで、著者の意向をいい表わす文である。J は E の ... will make this clear, F の va nous mettre cela sous les yeux に影響されたのかもしれないが、これでは原著者の意向は出せない。

löst man sie in Dreiecke auf: 「いくつかの三角形に分解する」 in \sim^A は結果の in。

sind die Tauschwerte ... Gemeinsames, wovon sie ein Mehr oder Minder darstellen : 「諸交換価値は1つの共通な或るものに還元され、諸交換価値はこの共通なものの多少を表わしている」

(12) Dies Gemeinsame kann nicht eine geometrische, physikalische, chemische oder sonstige natürliche Eigenschaft der Waren sein. Ihre körperlichen Eigenschaften kommen überhaupt nur in Betracht, soweit selbe sie nutzbar machen, also zu Gebrauchswerten. Audererseits aber ist es grade die Abstraktion von ihren Gebrauchswerten, was das Austauschverhältnis der Waren augenscheinlich charakterisiert. Innerhalb desselben gilt ein Gebrauchswert grade so viel wie jeder andre, wenn er nur in gehöriger Proportion vorhanden ist. Oder, wie der alte *Barbon* sagt:

„Die eine Warensorte ist so gut wie die andre, wenn ihr Tauschwert gleich groß ist. Da existiert keine Verschiedenheit oder Unterscheidbarkeit zwischen Dingen von gleich großem Tauschwert.“⁸

⁸„One sort of wares are as good as another, if the value be equal. There is no difference or distinction in things of equal value ... One hundred pounds worth of lead or iron, is of as

great a value as one hundred pounds worth of silver and gold."^{1*} (*N. Barbon*, l. c. p. 53 u. 7.)

^{1*}, ... Blei oder Eisen im Werte von einhundert Pfund Sterling haben gleich großen Tauschwert wie Silber und Gold im Werte von einhundert Pfund Sterling."

selbe : Ihre körperlichen Eigenschaften を受ける。selbe を一般の指示代名詞として用いるのはかなり古風である。今日では soweit diese die (=die Waren) nutzbar machen, also zu Gebrauchswerten というであろう。「商品の物としての諸性質が商品を有用にするかぎり、したがって使用価値にするかぎりにおいて」

... ist es..., was... : 「～するのは～である」の強調形式はこの場合なら

... ist es grade die Abstraktion, die ... charakterisiert

とするほうが多い。

Abstraktion : 「引きはなし、除くこと」 abstrahieren の名詞化。die Abstraktion von ihren Gebrauchswerten 「使用価値を度外視すること」 あとで von ... abstrahieren のかたちで出てくる。

... gilt... gerade so viel wie... : 「～とまったく同じだけのものと認められる」 「まったく同じだけの意義をもつ」という訳文は適切でない。

(13) Als Gebrauchswerte sind die Waren vor allem verschiedner Qualität, als Tauschwerte können sie nur verschiedner Quantität sein, enthalten also kein Atom Gebrauchswert.

kein Atom Gebrauchswert : gar keinen Gebrauchswert 「原子」といったのは極端に小さいものを挙げただけで、「毫末も～ない、全然～ない」の意。「分子」という訳語はおかしい。なおこの語法は ein Glas Wasser (量名詞の数量規定) と同じである。商品の2つのファクターという本節の要約がここにあ

る。商品は、

- (1) 使用価値としては 質がさまざまであり、
- (2) 交換価値としては 量がさまざまだけで、いささかも使用価値を含まない。

(14) Sieht man nun vom Gebrauchswert der Warenkörper ab, so bleibt ihnen nur noch eine Eigenschaft, die von Arbeitsprodukten. Jedoch ist uns auch das Arbeitsprodukt bereits in der Hand verwandelt. Abstrahieren wir von seinem Gebrauchswert, so abstrahieren wir auch von den körperlichen Bestandteilen und Formen, die es zum Gebrauchswert machen. Es ist nicht länger Tisch oder Haus oder Garn oder sonst ein nützlich Ding. Alle seine sinnlichen Beschaffenheiten sind ausgelöscht. Es ist auch nicht länger das Produkt der Tischlerarbeit oder der Bauarbeit oder Spinnarbeit oder sonst einer bestimmten produktiven Arbeit. Mit dem nützlichen Charakter der Arbeitsprodukte verschwindet der nützliche Charakter der in ihnen dargestellten Arbeiten, es verschwinden also auch die verschiedenen konkreten Formen dieser Arbeiten, sie unterscheiden sich nicht länger, sondern sind allzusamt reduziert auf gleiche menschliche Arbeit, abstrakt menschliche Arbeit.

die von Arbeitsprodukten: 「労働生産物であるという性質」

... ist uns... bereits in der Hand verwandelt: 「その労働生産物もわれわれの手の中であって変化をとげている」 uns は Hand の所属を表わす D 格。「われわれの手」としなければならない。「われわれの手で転化されている」と訳すと、われわれが手を下して変化させた、というふうに解されるからよくない。「われわれの気がつかないうちに」は F の à notre insu を採ったものであろうが、適訳とはいえない。

Abstrahieren wir von seinem Gebrauchswert: 「その使用価値を度外視するなら

ば」この(14)のはじめにある von ~ absehen の言い換えで、「その使用価値を捨象するならば」は不適當。abstrahieren が自動詞であることに留意すべきである。

abstrakt menschliche Arbeit: 「抽象的・人間的労働」「抽象的人間労働」と訳されているが、難解な表現である。abstrakte ではなく、abstrakt であるから、これは形容詞 menschliche にかかる副詞であり、Arbeit にかかる形容詞ではない。したがって「抽象的に人間的」すなわち「抽象的な視点からみた人間の労働」である。この概念について青木書店版の訳者が加えた注は意味深い。

抽象的・人間的労働 (abstrakt menschliche Arbeit) ... , 「抽象的労働 (abstrakte Arbeit)」というわけは、... 労働の規定された・有用的な・具体的な・性格が捨象されるからであり、「人間的労働 (menschliche Arbeit)」というわけは、労働はここでは、人間的労働力一般の支出としてのみ計算にはいるからである。(『資本論』初版の付録)

この注でみると、問題はきわめて専門的で、語学の領域をはるかに越えている。

(15) Betrachten wir nun das Residuum der Arbeitsprodukte. Es ist nichts von ihnen übriggeblieben als dieselbe gespenstige Gegenständlichkeit, eine bloße Gallerte unterschiedsloser menschlicher Arbeit, d. h. der Verausgabung menschlicher Arbeitskraft ohne Rücksicht auf die Form ihrer Verausgabung. Diese Dinge stellen nur noch dar, daß in ihrer Produktion menschliche Arbeitskraft verausgabt, menschliche Arbeit aufgehäuft ist. Als Kristalle dieser ihnen gemeinschaftlichen gesellschaftlichen Substanz sind sie Werte — Warenwerte.

gespenstige Gegenständlichkeit: 「幻のような対象性」では分かりにくいとおもう。E が *unsubstantial reality*, F が *réalité fantomatique* と訳しているのを

参照すべきである。gegenständiglich という形容詞は körperlich, dinglich, sachlich, anschaulich などと言い換えられるから (Wahrig), 要するに「具体的, 物的」ということである。したがってこの句は「実体のはっきりしないもの」というほどの意に取るのがいいとおもわれる。なお Gegenständlichkeit はDに説明がない。

eine bloße Gallerte unterschiedsloser menschlicher Arbeit: 「無差別の人間労働の単なる凝固物」 dieselbe ... Gegenständlichkeit, die eine bloße ... Arbeit ist のように関係文で拡張すると分かりやすい。不定冠詞づきの名詞を添えるだけで, こういう説明文になることがある。

(16) Im Austauschverhältnis der Waren selbst erschien uns ihr Tauschwert als etwas von ihren Gebrauchswerten durchaus Unabhängiges. Abstrahiert man nun wirklich von Gebrauchswert der Arbeitsprodukte, so erhält man ihren Wert, wie er eben bestimmt ward. Das Gemeinsame, was sich im Austauschverhältnis oder Tauschwert der Ware darstellt, ist also ihr Wert. Der Fortgang der Untersuchung wird uns zurückführen zum Tauschwert als der notwendigen Ausdrucksweise oder Erscheinungsform des Werts, welcher zunächst jedoch unabhängig von dieser Form zu betrachten ist.

Im Austauschverhältnis der Waren selbst: 「商品の交換比率そのものにおいては」 この selbst は直前の Waren にではなく, Austauschverhältnis にかかる。

Abstrahiert man ... von: すでに出ているが, この abstrahieren は自動詞で, von ... absehen に近い。

wirklich: 「実際に」 「現実には」とは少し違う。

... erhält ihren Wert: 「価値を受けとる」はおかしい。論理操作によって使用価値を度外視してみると, 「残るところは価値だけである」という趣旨であ

ろう。

(17) Ein Gebrauchswert oder Gut hat also nur einen Wert, weil abstrakt menschliche Arbeit in ihm vergegenständlicht oder materialisiert ist. Wie nun die Größe seines Werts messen? Durch das Quantum der in ihm enthaltenen „wertbildenden Substanz“, der Arbeit. Die Quantität der Arbeit selbst mißt sich an ihrer Zeitdauer, und die Arbeitszeit besitzt wieder ihren Maßstab an bestimmten Zeitteilen, wie Stunde, Tag usw.

Wie nun die Größe . . . : Wie soll man nun die Größe ...あるいは Wie kann man nun die Größe ... のように補う。

(18) Es könnte scheinen, daß, wenn der Wert einer Ware durch das während ihrer Produktion verausgabte Arbeitsquantum bestimmt ist, je fauler oder ungeschickter ein Mann, desto wertvoller seine Ware, weil er desto mehr Zeit zu ihrer Verfertigung braucht. Die Arbeit jedoch, welche die Substanz der Werte bildet, ist gleiche menschliche Arbeit, Verausgabung derselben menschlichen Arbeitskraft. Die gesamte Arbeitskraft der Gesellschaft, die sich in den Werten der Warenwelt darstellt, gilt hier als eine und dieselbe menschliche Arbeitskraft, obgleich sie aus zahllosen individuellen Arbeitskräften besteht. Jede dieser individuellen Arbeitskräfte ist dieselbe menschliche Arbeitskraft wie die andere, soweit sie den Charakter einer gesellschaftlichen Durchschnitts-Arbeitskraft besitzt und als solche gesellschaftliche Durchschnitts-Arbeitskraft wirkt, also in der Produktion einer Ware auch nur die im Durchschnitt notwendige oder gesellschaftlich notwendige Arbeitszeit braucht. Gesellschaftlich notwendige Arbeitszeit ist Arbeitszeit, erheischt, um irgendeinen Gebrauchswert mit den vorhandenen gesellschaftlich-normalen Produktionsbedingungen und dem gesellschaftlichen Durchschnittsgrad von Geschick und Intensität der Arbeit darzustellen. Nach der

Einführung des Dampfwebstuhls in England z. B. genügte vielleicht halb so viel Arbeit als vorher, um ein gegebenes Quantum Garn in Gewebe zu verwandeln. Der englische Handweber brauchte zu dieser Verwandlung in der Tat nach wie vor dieselbe Arbeitszeit, aber das Produkt seiner individuellen Arbeitsstunde stellte jetzt nur noch eine halbe gesellschaftliche Arbeitsstunde dar und fiel daher auf die Hälfte seines frühern Werts.

je fauler oder ungeschickter ein Mann, desto wertvoller seine Ware : ... ein Mann ist, desto wertvoller ist seine Ware と補う。

gesellschaftlich notwendige Arbeitszeit : 「社会的に必要な労働時間」 直前で定冠詞をつけているのにここで無冠詞形なのは、名称に注目させるため、こういうふうに変更して定義を下すときなどはとくに無冠詞形が好まれる。

Arbeitszeit, erheischt, um ... : 過去分詞 erheischt は述語句を作る。Arbeitszeit, die erheischt ist, um ... 「～のために必要とされる労働時間」のような関係文の短縮形と考えてよい。

(19) Es ist also nur das Quantum gesellschaftlich notwendiger Arbeit oder die zur Herstellung eines Gebrauchswerts gesellschaftlich notwendige Arbeitszeit, welche seine Wertgröße bestimmt.⁹ Die einzelne Ware gilt hier überhaupt als Durchschnittsexemplar ihrer Art.¹⁰ Waren, worin gleich große Arbeitsquanta enthalten sind oder die in derselben Arbeitszeit hergestellt werden können, haben daher dieselbe Wertgröße. Der Wert einer Ware verhält sich zum Wert jeder andren Ware wie die zur Produktion der einen notwendigen Arbeitszeit zu der für die Produktion der andren notwendigen Arbeitszeit. „Als Werte sind alle Waren nur bestimmte Maße festgeronnener Arbeitszeit.“¹¹

⁹Note zur 2. Ausg. „The value of them (the necessaries of life) when they are exchanged the one for another, is regulated by the quantity of labour necessarily required, and

commonly taken in producing them.“ „Der Wert von Gebrauchsgegenständen, sobald sie gegeneinander ausgetauscht werden, ist bestimmt durch das Quantum der zu ihrer Produktion notwendig erheischten und gewöhnlich angewandten Arbeit.“ („Some Thoughts on the Interest of Money in general, and particularly in the Public Funds etc.“, London, p. 36, 37.) Diese merkwürdige anonyme Schrift des vorigen Jahrhunderts trägt kein Datum. Es geht jedoch aus ihrem Inhalt hervor, daß sie unter Georg II., etwa 1739 oder 1740, erschienen ist.

¹⁰„Alle Erzeugnisse der gleichen Art bilden eigentlich nur eine Masse, deren Preis allgemein und ohne Rücksicht auf die besonderen Umstände bestimmt wird.“ (Le Trosne, l. c. p. 893.)

¹¹K. Marx, l. c. p. 6.¹*

¹*Siehe Band 13 unserer Ausgabe, S. 18

das Quantum... oder die zur... Arbeitszeit: oder は「すなわち」であって「または」ではない。A oder B は A と B の意味によって、理解と表現の仕方を変えなくてはならない。1 oder 2 は entweder 1 oder 2 であり、「1 すなわち 2」ではありえないから「または」であるが、oder が言い換えの場合には「すなわち」となる。言い換えて「または」が正しいのは「またはこうもいえる」というときである。この文では、「使用価値の産出のために社会的に必要な労働時間」の句は「社会的に必要な労働の量」の説明的言い換えである。

wie die zur Produktion der einen notwendigen Arbeitszeit: 「1 つの商品の生産に必要な労働時間」 notwendigen は独文テキストの誤植であろう。notwendige が正しい。

(20) Die Wertgröße einer Ware bliebe daher konstant, wäre die zu ihrer Produktion erheischte Arbeitszeit konstant. Letztere wechselt aber mit jedem Wechsel in der Produktivkraft der Arbeit. Die Produktivkraft der Arbeit ist durch

mannigfache Umstände bestimmt, unter anderen durch den Durchschnittsgrad des Geschickes der Arbeiter, die Entwicklungsstufe der Wissenschaft und ihrer technologischen Anwendbarkeit, die gesellschaftliche Kombination des Produktionsprozesses, den Umfang und die Wirkungsfähigkeit der Produktionsmittel, und durch Naturverhältnisse. Dasselbe Quantum Arbeit stellt sich z. B. mit günstiger Jahreszeit in 8 Bushel Weizen dar, mit ungünstiger in nur 4. Dasselbe Quantum Arbeit liefert mehr Metalle in reichhaltigen als in armen Minen usw. Diamanten kommen selten in der Erdrinde vor, und ihre Findung kostet daher im Durchschnitt viel Arbeitszeit. Folglich stellen sie in wenig Volumen viel Arbeit dar. Jacob bezweifelt, daß Gold jemals seinen vollen Wert bezahlt hat.^[20] Noch mehr gilt dies vom Diamant. Nach Eschwege hatte 1823 die achtzigjährige Gesamtausbeute der brasilischen Diamantgruben noch nicht den Preis des $1\frac{1}{2}$ jährigen Durchschnittsprodukts der brasilischen Zucker- oder Kaffeepflanzungen erreicht, obgleich sie viel mehr Arbeit darstellte, also mehr Wert. Mit reichhaltigeren Gruben würde dasselbe Arbeitsquantum sich in mehr Diamanten darstellen und ihr Wert sinken. Gelingt es, mit wenig Arbeit Kohle in Diamant zu verwandeln, so kann sein Wert unter den von Ziegelsteinen fallen. Allgemein: Je größer die Produktivkraft der Arbeit, desto kleiner die zur Herstellung eines Artikels erheischte Arbeitszeit, desto kleiner die in ihm kristallisierte Arbeitsmasse, desto kleiner sein Wert. Umgekehrt, je kleiner die Produktivkraft der Arbeit, desto größer die zur Herstellung eines Artikels notwendige Arbeitszeit, desto größer sein Wert. Die Wertgröße einer Ware wechselt also direkt wie das Quantum und umgekehrt wie die Produktivkraft der sich in ihr verwirklichenden Arbeit.^{1*}

^{1*} 1. Auflage folgt: Wir kennen jetzt die *Substanz* des Werts. Es ist die *Arbeit*. Wir kennen sein *Größenmaß*. Es ist die *Arbeitszeit*. Seine *Form*, die den *Wert* eben zum *Tausch-Wert* stempelt, bleibt zu analysieren. Vorher jedoch sind die bereits gefundenen

Bestimmungen etwas näher zu entwickeln.

Je größer die ... desto kleiner: ... die Produktivkraft der Arbeit ist, desto kleiner ist die ... と補う。

die Produktivkraft der sich in ihr (=Ware) verwirklichenden Arbeit: 「その商品において具体化される労働の生産力」 再帰動詞は受動的に用いられることが多いが、日本語訳には工夫がある。ここは「自らを実現する」よりは「実現される、具体化される」のほうがよい。

(21) Ein Ding kann Gebrauchswert sein, ohne Wert zu sein. Es ist dies der Fall, wenn sein Nutzen für den Menschen nicht durch Arbeit vermittelt ist. So Luft, jungfräulicher Boden, natürliche Wiesen, wildwachsendes Holz usw. Ein Ding kann nützlich und Produkt menschlicher Arbeit sein, ohne Ware zu sein. Wer durch sein Produkt sein eigenes Bedürfnis befriedigt, schafft zwar Gebrauchswert, aber nicht Ware. Um Ware zu produzieren, muß er nicht nur Gebrauchswert produzieren, sondern Gebrauchswert für andre, gesellschaftlichen Gebrauchswert. {Und nicht nur für andre schlechthin. Der mittelalterliche Bauer produzierte das Zinskorn für den Feudalherrn, das Zehntkorn für den Pfaffen. Aber weder Zinskorn noch Zehntkorn wurden dadurch Ware, daß sie für andre produziert waren. Um Ware zu werden, muß das Produkt dem andern, dem es als Gebrauchswert dient, durch den Austausch übertragen werden.} ^{11a} Endlich kann kein Ding Wert sein, ohne Gebrauchsgegenstand zu sein. Ist es nutzlos, so ist auch die in ihm enthaltene Arbeit nutzlos, zählt nicht als Arbeit und bildet daher keinen Wert.

^{11a}Note zur 4. Aufl. — Ich schiebe das Eingeklammerte ein, weil durch dessen Weglassung sehr häufig das Mißverständnis entstanden, jedes Produkt, das von einem andern als dem Produzenten konsumiert wird, gelte bei Marx als Ware. — F. E.

Es ist dies der Fall, wenn...: 「～という場合がそれである」 Es は文を非人称化するための形式的主語。真の主語は dies である。

Aber weder Zinskorn noch Zehntkorn wurden dadurch Ware, daß sie für andre produziert waren: 「年貢穀物も十分の一税穀物も、他人のために生産されたというだけでは商品にならなかった」 nur を補って nur dadurch と読む。エンゲルスの追加・挿入文の最初にある Und nicht nur für andre schlechthin 「単に他人のため、というだけでは足りない」をみれば、こういう補足の必要なことが分かる。この場合「ただ他人それ自体のための、ではない」という訳文はおかしい。

追記：1992年5月13日の朝日新聞によると、マルクス・エンゲルス全集（MEGA）の今後の編集方針を検討する国際会議が本年3月に南仏のエク・アン・プロヴァンスで開催された由である。出席者のひとりである大谷禎之介氏の報告で、「歴史的・批判的全集」となるはずのこの集成は1975年に刊行が開始されたが、最近の情勢の激変に対応することが必要になったという。この精密な校訂全集が完成すれば、研究は一層学問的に進んだものとなるであろう。またそのときには、語学的にみてさらに正確な邦訳が試みられるに相違ない。